

2019年1月15日放送

脳梗塞って何ですか？



筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター准教授
総合病院水戸協同病院 脳神経外科 益子 良太

司会者：今日は、脳梗塞のお話をさせていただきます。よく脳卒中とか脳梗塞とかと聞くのですが、違いは为什么呢？

益子：脳卒中とは、脳血管の突然起こる病気全体を指した言葉で、脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血などのことを指します。

司会者：それでは、その中で、脳梗塞とは一体どのような病気でしょうか？

益子：脳梗塞にはいくつか種類がありますが、全て、簡単にいえば、脳の血管が閉塞してその先に血液が循環しないことによって、血液の行き渡らない領域の脳細胞が死んでしまうことです。脳梗塞には主に3種類があります。まず、脳の比較的太い血管が動脈硬化などで細くなり詰まってしまうアテローム性脳梗塞、次に、心臓の中で血栓が作られて、それが血流によってやってきて脳の血管をつめてしまう心原性脳梗塞があります。そして最後に、少しややこしいのですが、脳には、検査では見えないような非常に細い血管が無数にあるわけですが、この細い血管が加齢や高血圧で傷んできて、中が詰ってしまったときに生じるラクナ梗塞があります。ラクナ梗塞は小さめの脳梗塞です。

司会者：脳梗塞はどのような症状がでるのでしょうか？

益子：脳には、場所によって様々な機能がありますので、脳梗塞の起こった場所や、大きさによって症状はかなり異なります。一つ共通しているのは、脳梗塞は、通常頭が痛くならない、という点です。そして、脳卒中の一部ですから、突然症状がでることもほぼ一致しています。症状は、主には、手足の脱力、しびれ、呂律が回らない、言葉がでてこない、などが一般的ですが、重い脳梗塞ですと、意識も障害されてもうろうとしたり、いびきをかいて反応しなくなったりすることもあります。

司会者：その様な場合、私達はどうすればよいのでしょうか？

益子：まず、すぐに救急車を呼びましょう。中には、症状が軽いから、あるいは、家に誰もいないから、という理由で受診が数時間遅れるかたがいらっしゃいますが、脳梗塞の治療は、後に述べますが、早く開始したほうが良いのです。

司会者：病院についたら何をしますか？

益子：まずは、簡単に診察をしたうえで、断層写真などで、同じ様な症状を呈する疾患、特に、脳内出血でないことを確認します。その結果、脳梗塞の可能性が高いと判断された場合、現在は、遺伝子組み換え組織プラスミノゲン活性化因子（t-PA）と言われる、血栓溶解剤の点滴を行うことが一般的です。症状が出現してから4.5時間以内に投与できる方のみが対象で、他にも、さまざまな制限がありますが、まず検討すべき治療方法です。さらに、脳の主要な血管の閉塞で6時間以内であれば、カテーテルを用いた、機械的な血栓回収療法の適応になることもあります。これは、行うことのできる施設は限られており、必要な場合は、その様な病院に搬送することになります。

司会者：脳梗塞は、上げていただいたような治療で良くなるのでしょうか？

益子：先程あげた治療方法は、効果的であることは間違いありませんが、合併症を生じる可能性があることに留意しなければなりません。また、脳梗塞では、なんらかの後遺症を生じることが多いのが実情で、やはり、脳梗塞に関しては、できるだけ予防策をとることが重要になります。

司会者：それでは、脳梗塞予防のためには、日頃どの様なことに注意すれば良いのでしょうか？

益子：まず、最も重要なのは、高血圧、糖尿病やコレステロールの異常など、いわゆる生活習慣病の治療を行うことです。もちろん禁煙も重要です。特に、高血圧はあらゆる脳梗塞にとどまらず、様々な脳卒中の最大の危険因子であることが判明しています。特に、若年者における高血圧は、脳梗塞の危険性を大変高めますので、十分な治療が必要です。高血圧は、それ自体では特に症状がでないもので、通院治療が後回しにされやすいのですが、非常に重要ですので、軽視は禁物です。また、心房細動という特殊な不整脈は、脳塞栓症の原因になりますので、不整脈を指摘された方や、動悸を感じる方は、専門の医療機関の受診をおすすめします。また、脳ドックも一部の脳梗塞の予防には有効な手段です。脳ドックで血管の狭窄が見つかった場合に、予防的に内服をしたり、重度の場合は、手術を行ったりすることで、脳梗塞の危険性を十分に低くすることができます。

司会者：ところで、かくれ脳梗塞、ということばを聞いたことがあります、これは何でしょうか？

益 子：隠れ脳梗塞、は、専門用語では、無症候性脳梗塞、といいます。症状がなく、たまたま検査で見つかった脳梗塞のことで、多くは小さな脳梗塞です。

司会者：では、無症候性脳梗塞、いわゆる隠れ脳梗塞は、悪さはしないのでしょうか？

益 子：いえ、隠れ脳梗塞のある患者さんは、将来、なんらかの脳卒中を呈する可能性が数倍高くなることが判明しています。さらに、認知症を発症する可能性も高まります。よって、治療は必要です。以前は、無症候性脳梗塞が見つかり、通常の脳梗塞に準じて、抗血小板薬といわれる、血液が固まりづらくする薬を内服していました。しかし、現在では、これの効果が無いことが判明しており、無症候性脳梗塞が見つかった場合には、脳梗塞の危険因子の治療を行うことが優先されています。

司会者：まとめると、脳梗塞は、脳の血管がつまることで脳細胞が死んでしまい様々な症状を呈する病気で、発見から治療まではなるべく早いほうが良い、しかし、なによりも、日頃の生活習慣病の管理による予防が最も大事である、ということですね。

益 子：そのとおりです。